

鶏 肉 情 勢

項 目			内 容										実 績									
供給	1. 国内	(1)	生産・処理動向調査((一社)日本食鳥協会令和7年11月末実施)によると、10月の推計実績は処理羽数65,293千羽(前年比101.1%)、処理重量197.8千ﾄﾝ(同101.6%)となった。11月は処理羽数が前年同月比98.5%、処理重量は同97.3%の見通し。12月は処理羽数が前年同月比100.7%、処理重量は99.0%の見込みとなっている。また、2026年1月は処理羽数前年同月比2.6%、処理重量は0.4%それぞれ増加の予測となっている。工場の人員については引き続き不足が課題となっている中、副産品(小肉・剣状軟骨など)・手羽中半割等の1.5次加工品は機械を導入し製造している産地が引き続き見られ、今後他産地にも広がっていくと予想される。										生産状況									
													単位:千羽、千トン、%									
供給	2. 輸入	(1)	財務省の貿易統計によると、令和7年10月の鶏肉(原料肉)の輸入量は前月から▲0.5千ﾄﾝの57.3千ﾄﾝ、国別ではブラジルが前月▲2.4千ﾄﾝの41.1千ﾄﾝ、タイが+2.4千ﾄﾝの15.7千ﾄﾝとなった。(独)農畜産業振興機構(ALIC)によると今後の見通しは、輸入量は11月は49.8千ﾄﾝ(前年比95.7%)、12月は47.0千ﾄﾝ(同94.0%)と11月・12月ともに減少する予測である。要因としては「輸入量は、主要輸入先であるブラジルやタイにおいて、労働者不足等により生産量が減少した影響を受けて、11月はやや、12月はかなりの程度、いずれも前年同月を下回ると予測する。なお、3カ月平均でも、前年同期をかなりの程度下回ると予測する。」とされている。										輸入動向									
													単位:千トン、%									
需要		(2)	令和7年10月の鶏肉調整品の輸入量は前月から+4.0千トンの49.0千ﾄﾝ、国別では中国が+1.0千ﾄﾝの18.3千ﾄﾝ、タイが+3.1千ﾄﾝの29.8千ﾄﾝとなった。																			
		(3)	(株)食品産業新聞社発行の畜産日報によると、10月の輸入鶏肉(モモ肉)の価格はブラジル産で460円/kgから480円/kg(前年390円/kg)、タイ産が500円/kg中心(同450円/kg)となっている。要因としては「輸入品は、依然として市中現物はタイトで、モノが出ない状況となっている。輸入品を扱う量販筋では国産ヘシフトする動きがみられる。円安やタイ・カンボジア紛争などの外部要因を背景に、しばらくは締まった展開が続くとみられる。」と報告されている。																			
需要	1. 家計消費	(1)	総務省統計局発表の家計調査報告(全国・二人以上の世帯1世帯あたり)によると、令和7年10月の生鮮肉消費(購入)は数量4,248g(前年比103.2%)、金額6,894円(同104.3%)と、数量・金額ともに前年を上回った。鶏肉は数量1,583g(同99.9%)・金額1,734円(同108.7%)・単価109.6円/100g(前年同月+8.9円)と数量は前年を下回ったものの、金額・単価は前年を上回った。牛肉は数量・金額ともに下回った。一方豚肉は数量・金額ともに前年を上回った。										鶏肉の消費動向									
													単位:グラム、円、%									
需要	2. 量販・卸	(1)	一般社団法人全国スーパーマーケット協会の販売統計調査によると、令和7年10月の食品売上高は全店ベースで前年比103.7%と前年を上回り、生鮮3部門の売上高は全店ベースで同101.9%、既存店ベースは同101.0%。畜産部門の売上高は約1,267億円で全店ベース同103.4%、既存店ベース同102.4%となった。また同社が取りまとめたスーパーマーケット景気動向調査によると、「牛肉の低調と、豚肉・鶏肉など値ごろ商品への需要シフト傾向は継続しているが、国産豚肉の相場が安定してきて、スライスや切り落としなどが好調に推移し、気温低下により鍋需要も高まり、全体を牽引した。牛肉は高止まり傾向が続き、輸入牛は不振も、国産にはやや回復傾向もみられた。鶏肉は価格高騰が続くなかでも堅調に推移した。加工肉は不調とする店舗が多かった。」と報告されている。										相場(年別・暦年)									
													単位:円									
需要	3. 業務・加工筋	(1)	日本ハム・ソーセージ工業協同組合調べによると令和7年10月度の鶏肉加工品仕向肉量は、前年比104.5%の5.0千ﾄﾝとなった。うち国内品は同100.0%の3.8千ﾄﾝ、輸入品については同122.3%の1.2千ﾄﾝと国内品・輸入品ともに前年を上回る結果となった。																			
在庫	1. 令和7年10月	(1)	(独)農畜産業振興機構(ALIC)の10月末時点推定期末在庫では国産品34.4千ﾄﾝ(前年比107.0%)、輸入品129.9千ﾄﾝ(同92.0%)、合計で164.3千ﾄﾝ(同94.8)となった。										在庫状況(推定)									
													単位:千トン、%									
在庫	2. 見通し	(1)	(独)農畜産業振興機構(ALIC)が発表した鶏肉需給表では、10月の出回り量は国産品150.6千ﾄﾝ(前年比101.4%)、輸入品57.7千ﾄﾝ(同100.0%)、合計208.4千ﾄﾝ(同101.0%)となり、前月からは国産品・輸入品の出回り量が増加した。10月以降、「出回り量は、11月はわずかに、12月はやや、いずれも前年同月を上回ると予測する。期末在庫は、11月はかなりの程度、12月はかなり大きく、いずれも前年同月を下回ると予測する。なお、過去5ヶ年の同月平均との比較では、11月はわずかに、12月はかなりの程度、いずれも下回る(11月:0.5%減、12月:7.8%減)と予測する。」とされている。										出回り量(推定)									
													単位:千トン、%									
相場	1. 令和7年11月動向	(1)	令和7年11月の月平均相場は、モモ肉736円/kg(前月差+5円)・ムネ肉545円/kg(同▲12円)正肉合計で1,281円/2kgと前月差▲7円、前年同月差+199円となった。(株)食品産業新聞社発行の畜産日報によると、「国産生鮮物モモの荷動きは活発化している。日経相場は740円前後を維持しているが、年末の最必要期に向かって徐々に上向く事が予測される。生産面では、順調な出荷が続くものの、22日に宮崎で今シーズン初の肉用鶏での鳥インフルエンザが発生するなど、シーズン本格化に伴い予断を許さない状況にある。輸入品の市中現物は依然としてひっ迫が強く、ブラジル産、タイ産ともにジリ高傾向に。外貨高と円安でこの先の調達もある程度絞られるとみられ、締まった展開が続きそう。」と報告されている。										相場(月別)									
													単位:円、%									
相場	2. 見通し	(1)	(一社)日本食鳥協会による生産・処理動向調査では、11月の生産状況は入雛羽数・処理羽数・処理重量ともに前年同月比を下回る見込みとなっている。国産鶏肉相場は、気温低下の影響による鍋需要、輸入品の価格上昇の影響によりモモ肉の販売は順調。鳥インフルエンザ等の影響により生産バランスも崩れ、上昇基調で推移している。ムネ肉は、4月以降輸入品の国内流通もあるが、依然高止まりが続いている。スペイン産豚肉の輸入全面停止、円安による輸入鶏肉の調達数量減に伴う国内流通価格の上昇も考え、今後の国産鶏肉相場の動向が気になる。このような事を踏まえ今後の相場は、モモ肉は12月以降の最必要期に期待し若干上昇の770円、ムネ肉は一部原料を輸入品に代替えしている加工メーカーもあるが、スペイン産輸入豚の問題等考慮し、550円前後で推移すると予測する。										相場(月別)									
													単位:円、%									
		(2)	12月10日(水)時点では養鶏場・家さん農場における鳥インフルエンザは採卵鶏で10月22日(水)以降6例確認されている。2024年シーズン1例目は10月17日(木)と昨年同時期の発生となった。また11月22日(土)には今シーズン初の肉用鶏で発生を確認した。																			
													※( )は見通し									